

色づくまで

相馬 一徹

庭木が伸び放題に伸び過ぎて手入れも老人の手に余るほどになった。

私は、自分でするのをあきらめて 業者にせん定を頼む決心をした。

「いつ頃から入りましたよか」と話が具体性を帯びて来た。

そのとき突然、私の中でちよつと待つて欲しいという気持ちを持ち上がった。

裏庭の柿の老木に今年(2019)はたくさんの実が付いた。彼らはまだ青い。せつかく着いた果実を青いまま摘み取ってしまうのはいかにも残念だ。

あれが色づくまで待つてどうと思った。

そこで、職人さんに「少し寒くなつてからお願ひします」とお茶を濁した。

一昨年の春、柿の木の周りを掘つて肥料入りの「花と野菜の土」を二袋入れてやつたのを思い出しながら例年より果実も大きく、たくさんなつて愛(いと)おしげに眺めた。

適度に熟すまで待つていることは大事なことだ。

夏場は盛大に成長を続ける木々の勢いに気圧されてまだ小さくて青く、葉影に隠れた果実の存在に気づかずになっていた。目立たない青柿の存在を忘れていたのだ。

どんなに小さく目立たなくても、すべて生き物だという視点を失わないようにしなければと自戒した。

「待つ」という行為は考えて見るとなかなか難しく、深いものがあると感じた。

人間関係では「待つ」と言う行為はもつと複雑で、相手の都合、心的状況、思惑等を受け入れなければならぬ。

私は、かつて高校教師の頃、カウンセラー係を担当したことがあった。書道の先生に頼み込んで大きな白紙に「待つ」と大書してもらった。

それをカウンセラーの廊下からよく見える位置についたてを置いて、その真ん中に貼り付けた。カウンセラーとして最初の仕事だった。

それから、私は部屋に座つて待つた。黙つて待つた。

いつか必ず「来訪者」が相談に訪れる。それまで黙つて待つと覚悟を決めた。

だが、一年、誰も訪れなかった。

老いて現職を退いて20年。当時は待つという行為に相談者本人の立場を考へるといふ思慮のかけらもなかった。カウンセラー自身の人格を磨くことも忘れていた。話しかけやすい演出も何も考へなかった。待つための条件を欠いていたのだ。

「待つ」ということは深く難しい。

柿の色づくのを待ちながら考へたことである。

作者 相馬一徹

題名 色づくまで

山陽新聞夕刊

2020.01.09 掲載